

紅、花
(九)野望

琉紅

(九) 野望

中山王子・尚巴志の元、軍は琉球統一へ向けて戦いの準備を進めていた。那覇の久米村との繋がりも増したのか、華人も頻繁に出入りする。

槍、刀、弓矢等を隠して備蓄し、武士のみならず農民まで含めた武器を扱う訓練が行われた。

尚巴志は、側に座し書類に目を通して大君の耳元で、そつと話かけた。

「なあ、大君殿。機は熟したと思わぬか。私は琉球を一つとし、明と琉球国として貿易をしたいのじゃ。わざわざ呼び寄せ、『尚』という名と金印を承ったのは、早く統一しろという意味。お前ならでき、やれと」

「尚巴志殿、明国の皇帝もそれがお望みのようですから。この三つに分かれた琉球を一つの国といたしましょう。私がお役に立ててみせます」

大君は、深々と頭を下げた。

「そういえば、そちに任せておいたヌル養成所はどんな具合か」

「思った以上の人材が集まってきております。中でも青江は、冷淡に策を練ることができ、軍師としての素質が十分にある

かと思えます」

「あの、青江だな。よく見かけておる。頭が切れ、活発な娘だ」

尚巴志は椅子から迫り出す。

大君は続ける。

「先日、北山王子が連れて来た美久は、まだまだ隠れた力を持つているように感じております。二人とも殿の望みを叶えるために、十分働いてくれるものと。ご安心ください」

「ふむ」

尚巴志は満足そうに頷いた。

それからというもの、中山の軍師は北へ向かって次々と城の攻略案を練り始めた。

停戦破棄を示す書状を、全島の城主に配布した。一方的な宣戦布告と各城主は受け取った。

美久はその状況を知る。

「ついに、始まったのね。私はどうしたらいいのかしら、賢龍様の北山もいずれ、敵対する……」

雨雲で覆われた深夜。こつそりと黒装束の男が、首里城の城壁を登っていく。そして、美久の枕元に手先を忍ばせては去っていった。

それは賢龍が美久に向けて書いた文だった。

『そなたは、すでに知っているだろうが、もうすぐ戦が始まる。北山は私の代を持たずに終わりそうだ。美久、最後にひと目会いたい……そなたを愛している。私の分まで生きて幸せになってくれ。それを最後に伝えなかった』

（ああ、賢龍様、私も、もう一度会いたいわ。でも、今私は中山の一人として尚巴志殿、大君様とに使えています。ああ、どうしたらいいの）

美久は悩んだ挙げ句、早朝、意を決し大君の部屋へと向かった。

「私は、もうこれ以上、ここにるのが耐えられません。どうぞ島へ帰して下さい」

「美久よ、そなたは、中山軍を率いる軍師の一人。ここを出ることはできぬ」

「それがイヤなんです。私は神人です」

「神儀と戦争は同じだろうに。人心を掌握し動かす。だから、お前を軍師の一人に上げているのだ」

「違います。神人は人の命を救うの、殺すのではないわ」

「殺すのが目的ではない。尚巴志殿も大きな琉球を作り、国

の民を救いたいんじゃない」

「三つの国で、うまくやっています。無理やり一つにする必要はないと思います」

大君は美久の両目をじっと見つめている。

そして立ち上がり、考えるように下を向き歩き出した。

「すぐには、それぞれの城の攻撃はしない。城主が城を明け渡して、降伏して従えば良い。その後、新しい城の主はここから送り込む。一つの国になり、民は安心して暮らせるのだ。尚巴志殿もそう考えた」

「違うわ、琉球が全て欲しいのよ。子供がおもちゃの独り占めしたがる様に、欲張っているの」

美久は感情的になり、論破できない。

「ここにおれば、そのような着物を着て、最高の食事が食べられるではないか。家族も楽ができるものを」

美久は着ていた首里織の着物を脱ぎ出し、白色の下着のままになった。

久高島での神人の時の格好に見える。

「何も要らない。私はニライカナイの浜に行けるだけでいいの。太陽は人に命を与えるの。そこで生まれた神人は、人を殺す計画、独り占めの欲望を叶える事に参加しないわ」

「はっはっ、美久よ。青江の戦い方を知っているか？ 力ず

くで城攻めをし、皆殺しにするのだ。王家は根絶やしにされる。お前なら、彼らを戦わず開城させ、命を救う事ができよう。それが神人の仕事では」

「嫌です。戦に加わりたくない」

「ならば島へ帰り、己だけ生き残れ。そして琉球で多くの血が流れるのを見届けるがよい。お前のせいだ……尚巴志殿と青江が組めば、北山は、まるごと火で焼きつくされるだろうに」

「イヤ！」

美久の頭の中に一瞬、今帰仁城に軍勢を率いて攻撃する青江、鬼女となった姿が浮かぶ。後ろで、大君と尚巴志がそれを黙認している。

(ああ、今度は、脅し……)

美久は両手を交差し腹を抱えこみ、そのまましゃがみこんだ。

青江の手が城を指差し、一本の矢が城の最上部、本丸へと飛んでいく。その矢は賢龍へと向かっている。

想像の中で、美久はとつさに彼の前に出て自分でその矢を背中で受けた。

「ああっ……」

(賢龍様)

想像の痛みだけで美久は絶句した。

「美久よ、お前は、運命に逆らうことは出来ないのじゃ。もしも北山軍が優勢になれば、我々の久高島も戦場となるであろうに。おまえが島を守らずにどうする」

「……………」

(ヌル様、私はどうすれば皆を守ることが出来ますか)

大君は、無言のまましゃがみ込んでいる美久の姿を見て、口元に笑みがこぼれた。

「いいのか、島を見捨てても」

美久は頭が混乱し、気が動転するのを必死で抑えていた。「そうじゃ美久、お前は利口だ。私を継いで欲しいものよ。やがて一つになるこの琉球国を導いてくれ」

大君は美久を軍師見習いという立場から、補佐へと引き上げた。大君に近くなることにより、監視の目が厳しくなった。

又、青江の参謀の次の地位にあたり、彼女にとっては自分の地位を脅かす面白くない存在となった。最近の大君の美久に対する信頼を考えると、自分と取って変わられるのも時間の問題と焦りを感じ始めていた。

中部での戦いに美久は軍師として初出陣した。敵対する城の主に文を送り、軍の力の違いを明確にし、戦わずとも、勝

敗は決まっている旨の文を送った。我々に同意し納税の約束をするなら攻撃はしないと。

美久の『出来るなら、戦いたくない。血を流したくない』という思いを切実に伝えた為、どちらとも被害が少なかった。中山が優勢になり戦場が北上するにつれて、美久と北山王子との関係を知っている青江に、中山に忠誠を誓った血判書を作らされた。拒否しようとしたが、姉のことを考えるとそれはできなかった。

その頃、美久の姉は、島に戻らず首里城で祭事の仕事をしていた。

中山を裏切り北山に行けば、姉の身に影響が及ぶことも心配であった。姉の安全を保障するために、青江に従わざるを得なかった。美久は中山に心身ともに鎖でつながれていた。青江は、名護城下に村民の格好をさせた兵を送り、北山王は暴君である事を吹聴してまわった。苦しい生活は北山王のせいだと、討伐するべきだと、周りに認識させる策だった。戦が始まったうえ雨が少ない日が続き、民の生活は困窮していた。

青江の策、人々の怒りの矛先を北山王に向けさせるのは、簡単な事だった。

尚思紹、巴志親子には、琉球統一の為の最後の決戦の場は

今帰仁城だと考え始めたからだった。

やがて、本殿を中心に巨大な城壁が幾重にも広がった首里城が完成した。

敵の領土、武將、領民等を次々に手に入れる美久の戦法を、大君はとても気に入っていた。彼女を首里城にある自分の部屋に呼び、長らく話しをすることが多くなった。

首里城では辛い戦の話ばかりだったが、城内で働く姉に会える為、実は嬉しかった。

姉は祭事の道具を揃える傍ら、明国からの三線や楽器の演奏について模索していた。

彼女は自作の曲を演奏することで、戦に巻き込まれている妹を慰めればと、考えていた。美久は、その時、本当に姉と、楽器の音に心をゆだねていた。

首里城へ頻繁に通い、大君の寵愛を受ける美久に対して、青江の心に嫉妬と憎悪が沸きあがっていた。

(そろそろ何とかしないと、本当に美久に大君の地位を取られてしまう)

青江は自分の親指を噛み続けた。黒く血だまりができるほどだった。最近の癖でもあった。

尚巴志は、浦添城から見える大きく広がった首里の城を自

慢げに、取り巻きや軍師、美久らを背にしてこう言った。

「見ろ、あの見事な城壁を。琉球国の城はもう出来上がって
いるぞ」

つづく